関西大学政治学研究部
2010 年度秋学期勉強会　β班　第 3 回

一党優位政党制下の最大野党

～日伊両国の最大野党に関する一考察～

2010 年 11 月 18 日(木)

文責：上野　竜馬

目次

Ⅰ.はじめに
Ⅱ.一党優位政党制とは何か？
Ⅲ.イタリア共産党と一党優位政党制
Ⅳ.日本社会党と一党優位政党制
Ⅴ.おわりに

Ⅰ.はじめに

日本の戦後政治史を眺めるにあたってのキー・ワードの一つに、一党優位政党制を挙げることができよう。ジョヴァンニ・サルトーリが提唱したことによって巷間に流布することとなったこの概念であるが、一党優位政党制といった際に注目されるのは、とかく優勢政党となりがちである。そこで本勉強会では、普段はあまり日の目を見ることのない「一党優位政党制下の最大野党」について、イタリア共産党と日本社会党の事例を通して、その特質を見出してみたい。

Ⅱ.一党優位政党制とは何か？

・一党優位政党制(predominant-party system)とは

—イタリアの政治学者ジョヴァンニ・サルトーリが提唱

—「*一党優位政党制とは二つ以上の政党があり、政権交代が事実上発生しないシステムといえ(中略) その主要政党が一貫して投票者の多数派(絶対多数議席)に支持されている政党制である*」(『現代政党学』、註…強調は報告者が付す)

→ポイント：政党多元主義の 1 類型

正当な選挙のもとでの多数確保

—ただし留保条件として「*絶対多数議席を持たぬ政党であっても政権担当の資格があるとはっきり認められている国の場合は例外として同等に扱う。*」(『現代政党学』)

→必ずしも絶対多数議席を確保する必要はない

・何が一党優位政党制をもたらすのか？

―T.J.ペンペルの議論…①多党制を助長する選挙制度

②従来の政治のあり方では対応できない内外環境の劇的変動

③支持基盤の固定化

④支持基盤の組み替え・拡大の能力

⇒多党制を助長する選挙制度にもかかわらず 1 党が優越するということは、優越政党(を含む政権)はキャッチオール・パーティ化し、対する野党は与党に対する批判の受け皿として抵抗政党化するのでは？

Ⅲ.イタリア共産党と一党優位政党制

ⅰ.イタリアの一党優位政党制

・優越政党：キリスト教民主党(DC:Democrazia Cristiana)

・最大野党：イタリア共産党(PCI:Partito Comunista Italiano)

・継続期間：1947～1994 年

ⅱ.前提の確認

・イタリアの下院

―選挙制度：完全比例代表制

―政権構成：DC の単独 or DC が第一党の連立政権

ⅲ.仮説の検証

・ベルリングェルの「歴史的妥協」

―1973 年 9～10 月、ベルリングェルが提示

共産主義者
社会主義者
カトリック
} 三大大衆勢力の同盟…「歴史的妥協」

→76 年総選挙で共産党が躍進

⇒第 3 次アンドレオッティ内閣の首班指名を棄権(＝消極的支持)

・「歴史的妥協」の挫折

―救世主であるがゆえに、DC の政策に反対できず

→PCI 内部・支持者から不満

→デモが頻発し、治安の悪化が進行

⇒79 年、第 5 次アンドレオッティ内閣より、PCI は政権離脱

＝「歴史的妥協」路線の失敗

・ポスト「歴史的妥協」期
—PCI は左旋回し、DC 批判に転じる
—83 年、第 1 次クラクシ(PSI)政権が誕生、「新保守主義革命」を打ち出す
→PCI は対するオルターナティヴを打ち出せず
—労働運動の支持など、反対党として活動

・抵抗活動へ
—クラクシ政権の賃金物価スライド制に対し、PCI は国民投票を請求
→国会外の勢力を動員、抵抗活動するも失敗
—86 年、第 17 回大会で「プログラムの政府」構想を提起
→与党の政策パッケージに対するオルターナティヴとしては不十分

・小括
—事実上の与党入りまでは、PCI は DC に対するオルターナティヴとして機能
—「歴史的妥協」の挫折以後、PCI は抵抗政党化
⇒過渡期に入ると、再度の政権入りを目指すのではなく抵抗政党化する

Ⅳ.日本社会党と一党優位政党制

ⅰ.日本の一党優位政党制

・優越政党：自由民主党
・最大野党：日本社会党
・継続期間：1955～1993 年

ⅱ.前提の確認

・日本の衆議院
—選挙制度：中選挙区制度
—政権構成：自由民主党の単独政権(83～86 年は新自由クラブとの連立)
※自民党内には右派から左派まで多くの派閥(包括政党)

ⅲ.仮説の検証

・オルターナティヴとしての安保
—自民党には「A 級戦犯」岸信介の存在
→戦前回帰しかねないため、米軍を忌避する市民は社会党支持へ

・60 年総選挙

―安保が奏功し、西尾派を含む右派離党をカバーする 144 議席獲得

→これ以後、議席は漸減傾向

→これ以後、議席の過半数を超える候補者を擁立せず

・オルターナティヴの不在

―安保後、党内の路線争いで自民党に対する明確なオルターナティヴを提出できず

―右派離脱により、議会否定の左派中心に

→議会の正統性を認めないため、その議会での決定も認められない

⇒議決させないため、抵抗政党化

Ⅴ.おわりに

与党に引き比べても、野党に関する研究は少ないのが現状である。政党システムや選挙制度などの違いを考慮すると、野党としての一般論を導き出すことは困難なのかもしれない。

そんな中、本勉強会では、「一党優位政党制下の最大野党」というフレームワークを用い、イタリアと日本の事例を通して、一党優位政党制のもとの最大野党についての考察を進めてきた。両党ともに全盛期は大きな党勢を誇っていたものの、過渡期には政権獲得に対する諦観から、オルターナティヴを提示できないものの与党批判に転じる抵抗政党としての性格を色濃くしていった。最大野党が政権獲得を目指さなくなることによって、一党優位政党制が長期にわたって存続するという結果をもたらすように思われる。

未熟な推論からなる仮説、不十分な検証など課題は依然として多い。今後、さらなる文献の収集や、より一層の精読に努め、質の向上を目指したい。

【参考文献】

池谷知明「政党と政党制」馬場康雄、岡沢憲芙〔編〕『イタリアの政治　「普通でない民主主義国」の終り？』早稲田大学出版部、1999 年。

石川真澄『戦後政治史　新版』岩波書店、2003 年。

伊藤昭一郎『イタリア共産党史　1943-1979―権力への困難な道―』新評論、1980 年。

伊藤武「イタリア」馬場康雄・平島健司〔編〕『ヨーロッパ政治ハンドブック』東京大学出版会、2000 年。

―――「イタリア・キリスト教民主党の崩壊過程」田口晃、土倉莞爾〔編〕『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』木鐸社、2009 年。

後房雄編『大転換――イタリア共産党から左翼民主党へ』窓社、1992 年。

梅澤昇平『野党の政策過程』芦書房、2000 年。

木下広史『開かれた多数派　イタリアの再生と共産党』新日本出版社、1977 年。

久米郁男、川出良枝、古城佳子、田中愛治、真渕勝『政治学』有斐閣、2003 年。

G・サルトーリ／岡沢憲芙・川野秀之訳『現代政党学　政党システム論の分析枠組み』早稲田大学出版部、2000 年。

新川敏光「五五年体制下の日本社会党―抵抗政党の意義と限界―」新川敏光『幻視の中の社会民主主義』法律文化社、2007 年。

高橋進「選挙・選挙制度」馬場康雄、岡沢憲芙〔編〕『イタリアの政治　「普通でない民主主義国」の終り？』早稲田大学出版部、1999 年。

馬場康雄「イタリア人と政治」馬場康雄、岡沢憲芙〔編〕『イタリアの政治　「普通でない民主主義国」の終り？』早稲田大学出版部、1999 年。

原彬久『戦後史の中の日本社会党　その理想主義とは何であったのか』中央公論新社、2000 年。

G・プライダム「イタリアの野党」E・コリンスキー〔編〕／清水望〔監訳〕『西ヨーロッパの野党』行人社、1999 年。

村上信一郎「崩れゆく《壁》――キリスト教民主党による一党優位政党システムの衰退」『日伊文化研究』13 号、1993 年、pp.15-30。

森本哲郎「「戦後体制」の終焉と政党システムの変動―比較の視点からみた戦後日本の政党システム―」森本哲郎〔編〕『システムと変動の政治学』八千代出版、2005 年。

――――「首相のリーダーシップ」森本哲郎〔編〕『現代日本の政治と政策』法律文化社、2006 年。

山田薫『イタリア共産党と戦後民主体制の形成―トリアッティの政治戦略の展開(1943 年～1948 年)―』シーエーピー出版、2002 年。

【参考 HP】

やそだ総研　http://www31.ocn.ne.jp/~yasodasoken/　(2010 年 11 月 17 日アクセス)